

平成18年度 第1回島根県社会教育委員の会（案）

日時：平成18年7月25日（火）

13：30～16：00

場所：島根県市町村振興センター 大会議室

- 1 開 会
- 2 挨拶（教育長）
- 3 出席者紹介（大國GL）
- 4 事務局説明（ " ）
- 5 議 題（進行：有馬委員）

【報告事項】

(1)平成18年度生涯学習課主要事業について

- | | |
|-------------------------|--------------|
| ①地域教育コーディネーター派遣事業について | （事務局説明：星野SL） |
| ②子どもの心安らぐ居場所づくり支援事業について | （事務局説明：後藤G員） |
| ③ふるさと教育推進事業について | （事務局説明：橘G員） |
| ④その他 | |
| ・ 県立図書館の開館について | （事務局説明：土江SL） |

－質疑・応答－

○有馬委員 以上4件、事務局から説明をいただきました。質問、意見がありましたら、出してください。

○福間委員 居場所づくりですが、効果を上げつつありますが、今年度で国庫補助は終わりです。来年度以降も続けるよう、松江市では心づもりをしています。多少でも県から助成があるものですか。

○後藤G員 居場所づくり事業ですが、皆様方から、継続の要望や、支援が得られないかという声を昨年末からたくさんいただいています。県としましても、先般、知事が上京した折に重点要望として国に対して事業の継続について要望をしてきたところです。

19年度以降については、今、文部科学省や厚生労働省が、放課後の子どもの健全育成の対策のために事業の再構築を進めているところです。この大ざっぱな概要が分かるのが8月末になるのではないかと聞いています。そのような動きを踏まえて、県としてはどのような対応ができるのかということを検討しているところです。

○福間委員 ということは、可能性はあるということですか。

○澤生涯学習課長 この事業については、文部科学大臣と厚生労働大臣の両方で、今後の放課後の対策として「放課後子どもプラン」（仮称）を創設するというところで合意がなされたところです。この両省で取り組むプランでは、教職を目指す大学生とか、退職教員等の協力を得て学習機会の提供に取り組んでいきたいとか、いろいろなことを考えているようです。具体的な連携方策、予算措置、推進体制等については、19年度概算要求を目途に、現在、両省で検討を重ねているところだ

と、21日の全国都道府県教育委員会連合会で大臣のあいさつがぁっているところだす。そうしたトップのところでの状況を受けながら、この概略が見えたところだ、また今度は県の予算要求等のところへも絡めていくことになるだろうと思います。現在のところは以上だす。

○福間委員 ぁりがとうございました。

○有馬委員 「地域教育コーディネーター」、「居場所づくり」、「ふるさと教育」も、従来からの事業だすので、今までの委員の方はある程度御存じの内容だすが、新任の委員の皆さん、いかがだしょうか、御質問がぁればどうぞ。

○佐藤委員 この居場所づくりというのは、放課後対策の学童保育と同じものだすか。それとは別個なものだしょうか。

○有馬委員 学童保育との違いというか、説明だすね。

○後藤G員 学童保育は厚生労働省という福祉のサイドが進める、親が就労している子どもたちに対する生活の場を提供するという趣旨のものだす。地域子ども教室あるいは子どもの居場所は、そうでない子どもも含めて、地域のボランティアを活用して地域の子を地域で育てていこうとするものだす。一番最初のスタートの事業の理念のところだ放課後児童クラブとは違っていますだ、実際に現場では、連携しながらやぁっているところもぁります。ある公民館では子どもの居場所をやぁっているところだ放課後児童クラブの子どもたちが指導員の先生に連れてきてもらって、そこで一緒に遊んで、また指導員の先生が先頭になって、放課後児童クラブに一列で帰っていくというところもぁります。そんな形で今、連携をしながら進んでいるところだす。

○佐藤委員 学童クラブとは違うということが分かりましたが、平日と土曜日ということは、ほとんど曜日が決まっているわけだすね。1週間のうちに何回かということだすね。

○後藤G員 そうだす。居場所によって違っており、それぞれの地域で受け入れが可能なところは、毎日やぁっているようなところもぁります。ボランティアの関係で、週に一回だけとか、土曜日だけといった居場所もぁります。それに対して、放課後児童クラブは、何日以上あるいは何人以上という規定がぁりますが、居場所にはぁりません。地域の実態にんじて、地域のボランティアの方に運営していただいているという状況だす。

○佐藤委員 ぁりがとうございました。

○若菜委員 県内で107カ所ということだしたが、パンフレットを見ますと、東部が多いと思います。私は西部だすが、どれぐらいの割合だしょうか。

○後藤G員 地域の実態もぁり難しいだすが、2対1ぐらいの比率で、東部が多いと思います。ただ、雲南市が、すべての小学校区、あるいは社会教育施設等にたくさん設置をしているために東部の比率が高いということだす。

○若菜委員 わかりました。

○有馬委員 活動の状況に若干地域差があるということだすね。

○後藤G員 そうだす。

○有馬委員 それでは、また進行していきますだすが、途中で関連したりして、御質問がぁりましたら、出していただくということだお願いします。

【協議事項】

(1) 学力調査結果の概要について（事務局説明：義務教育課 長岡 S L）

（質疑回答者：義務教育課 古藤指導主事）

－質疑・応答－

○有馬委員 学力問題は、学力の低下という言葉で近年、大変話題になっています。国も、都道府県もいろいろ学力調査をやっているようです。そこで、本県における学力調査の結果の報告をいただいたわけです。

それでは、しばらくの間、先ほど説明いただいた点をめぐって質疑等がありましたら、お願いします。

○寺本委員 意識に関する調査についてですが、いわゆる4ページの④のウの自己肯定感、また自己を伸ばす力について、前回と比べて小学校も中学校も大きく伸びていますが、これは何か特別な指導とか行われたのでしょうか。

○古藤（義務教育課指導主事） これについての明確な原因は、今の段階では、はっきりとしたものを把握していません。ただ、当然平成15年度に行いました結果をもとにして、いろいろな指導がなされ、その表れも一つはあろうかと考えてはいます。先ほど長岡サブリーダーの説明にもありましたが、前回調査との違いで、調査時期のことがありました。前は1月調査でしたが、今回は5月の連休明けで、その辺のことも案外データの中に、表立って明確な形ではないのですが、反映されているかもしれないと思っています。この辺は、今度、10月を目途にしていますが、全国調査等の結果で、島根県だけではなく、他県を含めた全国的な傾向はどうかということをあわせて考えないと、今の段階では申し上げにくいと考えています。

○有馬委員 平成15年の時と質問の表現は全くいっしょなのですか。

○古藤 ほとんど同じと考えています。前は県内独自で作っていますので、一言一句ということは言えないのですが、内容的に同じだと受け取れるものについては同じくくりで調査、まとめをしました。

○小川委員 前回調査は、島根県のみでやっておられるのですか。全国比較はしていないということですか。

○古藤 おっしゃるとおりです。

○小川委員 今回は悉皆調査ですが、無効回（解）答はどれくらいあったのでしょうか。

○古藤 ベネッセコーポレーションからは、今のところ、そういう情報はもらっていません。基本的に出したものについては、すべてきちんとされたものという前提でお返しをしています。ただ、先生方が一生懸命、時間を分けてでもやらないかと言ったのですが途中で投げ出してしまう子どもの中にはおります。そういう意味では、無効票のようなイメージのものもあると思うのですが、送られてきた回（解）答用紙は、すべて同じように集計の中に入れております。ただ、先ほどの説明にもあったのですが、この調査は、通常の教育課程の中で行われている児童生徒を対象に行ったものですが、中には特殊学級とか、あるいは下学年の問題で行った生徒、児童もいますので、こういった例については、集計の中からは除外して、個人にのみデータを返しており、全体集計からは外

しています。

○小川委員 分かりました。

○仲野委員 悉皆調査ということで、非常にしっかりした調査がなされたと思いますが、この結果で、例えば否定的な部分が、基礎的な生活体験とか社会生活の上でいろいろなところに出てきています。社会教育委員の会でこれを見せていただいたということは、こういう結果について検討してほしいという提案があるのでしょうか。結果に基づいて積極的な立場で何か対応してほしいということでしょうか。

○古藤 義務教育課として、今、これを皆様に検討してくださいということで今日お知らせしたわけではありません。現段階でできる情報提供ということで持ち出しています。今後、明日から始まる県内5カ所の結果説明会、それから保護者の方々への情報提供としてはリーフレット作成、こういったものを通して、出せる情報については、皆様にも提供していきたいと思います。地域や学校だけではなく、いろいろな場面で、島根の子どもたちのためにどういう手だてが打てるかを一緒になって考えていただけたらと考えております。義務教育課だけではなく、生涯学習課、保健体育課等からのアプローチも当然あると思いますので、一緒になって考えていただけたらということです。

○磯田委員 この意識に関する調査結果ですが、130問を40分で実施したとおっしゃいました。そうすると、1分間に3問ずつです。それは、きちっと40分来たら、時間ですのような形でやられたわけですか。

○古藤 意識調査については、子どもたちがしっかり回答するということが前提ですので、早く終われば、早目に切り上げてもいいと連絡しました。時間のかかる児童生徒については延長してもよいので、子どもたちがしっかり回答できるように、時間は柔軟に取り計らうようお願いしています。

質問数が130ぐらいというのは、今回委託したベネッセコーポレーションの質問数を基準にしております。およそ小学校、中学校の児童生徒が1単位時間で標準的にできるであろう質問数になっています。特に混乱があったという報告は受けておりませんが、小学校の低学年においては、平易な文面でも時間がかかる児童がいたということで、幾つかの小学校では、長目に時間を設定したはずですが。

○磯田委員 それで、「とても」と「まあ」と「あまり」と「まったく」の4段階の結果のようなものも、10月の報告では出てくるのですか。

○古藤 そうです。

○磯田委員 「とてもあてはまる」「まああてはまる」、それを4段階でずっと丸をつけていくわけですね。

○古藤 すみません、今、調査票のサンプルを手元に持ってなかったのですが、ちょっとうろ覚えなのですが、確かそうになっていたと思います。

○磯田委員 そうすると、この4段階で子どもたちがざあっと丸をつけた分なののでしょうか。

○古藤 何%の子どもがそれぞれに回答したかということになります。

○磯田委員 いわゆる肯定と否定だけでやると両極端になってくるので、ここら辺の子どもたちのいろいろな微妙な思いとかは、この4段階評価で、若干何か見えてくることもあるのではないかと思ったりします。

○古藤 おっしゃるとおりです。報告書では、回答の割合ですね。例えば10%、30%、40%、20%ですね。そういうふうに確か書いてあったと思います。（※報告書では、肯定回答やA層、B層、C層としての集計のみ）

○磯田委員 自分が地域で活動しているので、地域に関して子どもたちがどういう意識を持っているのか見ると、基礎体験の、「自分が住んでいる地域での活動に参加する」これぐらいです。こういう聞き方だけで子どもたちが、地域活動に何%が一生懸命に取り組んでいるとか、まあまあだとかという形の評価でしか出てこないのかなあと思ったりもしました。何か業者の方に言われるときには、もう少し地域の活動について、先ほどの奉仕活動ですとか体験活動ですとか、非常に重要視している状況もあります。地域で子どもたちが何か活動をするという項目のとき、もう少し具体的なもので、意識を我々に享受してもらえると、有り難いと思います。

○古藤 全くそのとおりだと思います。私どももなるべくそういったこちらからの要望をベネッセコーポレーションにも伝えて、質問を構成しております。ベースはベネッセのものでしたが、前回の島根県調査も含め、こういう質問項目を入れてもらえないだろうかと要望しました。今後も、いいアイデア、意見等をたくさんいただいた上で、来年度以降も行っていきたいという基本的な路線は持っています。ただ、ベネッセコーポレーションは、全国で同じものを使っていますので、島根県だけのリクエストで急に変えては全国との比較ができないとか、他県でもやはり過去のそれぞれの自治体の比較をしますので、急激な変更を一度にできないという事情がありましたので、少しずつの変更になってしまいました。

○磯田委員 分かりました。ありがとうございました。

○藤田委員 前回の調査のときと、このたびの調査で、質問形式、データの分析の仕方、評価の方法は違いますか。

○古藤 基本的な分析の仕方等については同じにしています。ただ、前は抽出でしたので県内の指導主事で行いましたが、今回は集計を業者に委託したところが一番大きな違いです。

○藤田委員 分かりました。

○奥田委員 大変乱暴な質問で、答えにくいと思いますが、今度の調査は、学力の低下が懸念されているからと言いますが、まだ第1次報告の段階ですが、集計した印象として、低下という傾向は見受けられたでしょうか。

○古藤 私の一存でお答えできない部分がありますが、（非常に奥歯に物の挟まったような言い方になるかと思いますが）、そういう傾向のあるものもありましたし、教科、学年においては、多少なりとも改善の傾向かなというものもあったというのが率直なところです。

○木村委員 1点は、この報告の5行目に、前回の結果を受けて、各学校で学習指導について改善されていると、改善状況を検討するために今回行われたと書いてありますが、実際、現場で本当にそれが改善したと言えるのでしょうか。例えば国語ですと、聞く態度とか、メモを取りながら聞く態度が、今回は良かった。これは指導の成果がうかがえると書いてあるわけですが、本当にそれが言えるかどうか。つまり前回、この力が弱かったので、本当に各学校がそこで努力したかどうか、学校自体の調査も同時にしないといけないのではないかと思います。子どもの到達度や実際の素点がアップしたから、指導の成果があったというように結論づけるのは早いというよりも危険だと思

います。

幸いに各教科ともいろいろな観点があります。それぞれの観点に対して、各学校がどんな努力をしたかも同時に調査して、子どもの結果の数値と、各学校の改善策とを照らし合わせて、ようやく指導の効果があつたとか、まだ指導が不十分だとかいうことを言わないといけないと思います。各学校の努力してることとといいますか、改善の重点が見えないというか、調査がしてないので、やるべきだということが1点です。

2点目は、後半の意識調査です。要素を見ると、一人の児童・生徒が勉強するために意欲があるとか、家庭でこうだとか、地域でこうだとか、学校でこうだというように、個人の勉強の態度とかスキルのこと調査があります。当然意識しながらの調査ですが、安定した気持ちで学校へ来ないと、絶対に学習が好きにならないし、学力もつかないと思います。なかなか勉強がうまくできない子とか、学力が定着しない子というのは、どうしても人間関係がうまくいかないとか、集団の中で疎外感を持っています。自分の学級、学年、学校の中で、自分はどのような存在かというような調査項目もないといけないと思います。そこがところが一番基盤になるのではないかと思います。

○古藤 2点目については、先ほどの磯田委員と同じように受け取らせていただきました。また、ベネッセと相談等をしていきたいと思っています。

1点目の各学校の改善状況についても併せて調査しなければという部分についてですが、全くそのとおりだと思っています。今回、1回目ということで、すべてのことを完璧に調査し尽くせたかという、多分にまだまだこれからのところもあると思います。県としては、今回の調査を3年間は続けたいという意識を持っていますので、来年度以降、改善をしていくところが必要かというところは、話に出ているところです。

また、各学校の取り組みについては、校長先生のおっしゃったとおり、各学校での振り返りも当然必要だと思います。その辺のことも含めて、明日から始まる経過説明会、秋の管理職研修会等で、意見をいただきながら、あるいはこちらの方からも各学校に後押しをしていきたいと考えております。

○有馬委員 それでは、3時まで休憩します。

【協議事項】

(2) 地域の教育力及び家庭の教育力の充実方策について (事務局説明：橘G員)

～アンケート調査結果から考える～

(3) 子どもの生活リズム向上全国フォーラムin島根について (事務局説明：橘G員)

－質疑・応答－

○有馬委員 今日、事務局から提案、説明いただくことは、「学力調査の結果の概要」、「家庭における親の子どもへの関わり方と意識に関する調査」、「子どもの生活リズム向上全国フォーラム」ですが、時間の終わりまで意見交換をする時間として取り扱いたいと思います。どこからでも結構ですので、質問、意見を出していただけたらと思います。

○福間委員 今回の調査等々を見て、まあまあというところもかなりあります。ところが、ある中学校の学校要覧を見ますと、私の時代と随分違ったなと思うのは、いろいろな横文字の名前のついた方々がたくさん入っています。例えばスクールアドバイザー、クラスサポーター、スクールカウンセラー、それから養護教諭が複数になっており、私の時代より7名の人が余計に入っています。それだけ入れなければいけないというのは、一体どこに原因があるだろうかということも春以来、疑問に思ってきました。もとより親が子育てに自信がないとか、社会が悪いとか、教師の力が落ちたとか、いろいろ複合しているでしょうが、子ども社会教育をやる立場の者が「ふるさと教育」「居場所」だけをやっていて、果たしてそれでいいのかという疑問を持ちながら出てきました。

この間、洪水で9名の方が公民館へ避難してこられました。その中の1家族6名でしたが、おじいさんが重度の障害者で車椅子でした。幸い私のところにはバリアフリーの部屋があり、風呂場も、洗濯機もついていましたので、障害者の避難場所としては非常に良かったのです。いつまでいていただいてもいけないし、何とか身の振り方を考えてあげないといけないと思い、障害者の方に福祉施設へしばらく行っていただいたらどうかということ行政と相談してやりかけたら、御家族が、実は私たちは一緒に住みたいと言われました。

なぜかという、そのおじいさんは筋ジストロフィーの方です。それで、私たちが支えておじいさんを畳の部屋で住まわせて、肝心のトイレ、風呂とかは介助してあげるけれども、できるだけおじいさんに自立していただくと考えておられました。それを施設へ入れたら、その能力がばったり落ちてしまうので、一緒に住みたいということでした。これは感心な家族だと思い、市と交渉して、よい市営住宅を見つけてもらって、5日目にお入りいただきました。

一般の家庭ならば、おそらく施設へ送って、それで終わりという気持ちではないかと思いますが、その家族は本当に助け合いながら、おじいさんを支えていらっしゃいました。そういう立派な家庭もあるかと思うと、避難所になった11カ所の公民館に聞いてみますと、随分聞くにたえない態度の方もいらっしゃるといことです。

次の世代を背負う子どもたちに、我々地域がどうしたらいいのか、もう少し具体的に教えていただきたいと思いました。

○有馬委員 大変に重たい、重要な、本質的な質問というか、意見ですが、委員の皆さん、事務局

からも、何かありましたらお願いしたいと思います。

○福間委員 それのつけ足しですが、きのう引っ越されました。何と使った部屋はきちんと掃除してです。トイレもふろ場も、後で全然構わなくてもいいようにして、家族そろって我々の事務室へ来て、「お世話になりました。」と言って出られました。本当、涙が出るようでした。だから、そういう社会とか、家族とかを我々が努力して、あの力を取り戻さないことには、なかなか世の中は良くなるという気がします。

○有馬委員 公民館もさることながら、地域や家庭が持っている大事な教育力が今の話の中で感じられるわけですが、そういうあたりにどこか、現代社会の中でひずみや欠落が起きているということかもしれません。

○磯田委員 以前、家庭の教育力が落ちてるということを、あちこちから声があったので、家庭、地域でいろいろ活動をしている者とすれば、家庭の教育力、地域の教育力は落ちてないということ頑張ったいきさつがありました。

このアンケートも、中間報告を聞いたとき、本当にそうかなあという疑問を持ったということ、この委員の会で話しました。その後、松本委員さんが山陰中央新報の「明窓」に書かれました。後で彼といろいろ話しをしたのですが、66%の回答ということは、あと34%の家庭の回答がないということです。その34%の方の回答がもしあれば、恐らくこの数字というのは大幅に、いろいろなことで変わってくるのではないかと頭に入れて、この数字や評価を読まなくてはいけないという感じで読みました。

それからもう一つは、この19ページの家庭の教育力の低下の意識という設問で、回答された本人が、本当に家庭の教育力が落ちていると感じているならば、どこら辺が自分としては家庭の教育力が落ちているかの回答が欲しかったです。ここには何々してる親が増加しているためだとか、親がどうだと他人ごとみたいな感じの回答が出ています。「あなたは家庭の教育力が落ちているということであれば、どういうことをもって家庭の教育力が落ちてると思えますか。」という設問が欲しかったと思いました。他人ごとみたいな書き方だと書きやすいといった意識を持ちました。

それから、15ページの「だれかに悩みを相談しますか。」というところで、配偶者、職場の友人や職場の同僚と話をするという回答ですが、このアンケートを回答された方は90%がお母さんです。ということは、お母さんがいろいろと悩みを持っていて、相談をする場合にはだれと相談していますかという読み方もできるわけです。そうすると、お母さんが友人やら職場の同僚に相談をされているのかなあと思いました。配偶者が1番と2番合わせて約80%から90%ありますので、やっぱり相方かなあと思います。また、友人や職場の同僚の方とお母さんが相談をして、子育てとか、悩みなどを解決したり、相談されてるのだという読み方もさせていただきました。

次に、8ページの子どもを褒めて育てるということで、ほとんど褒めています。褒め殺しとでも言うのでしょうか。設問の、「あなたはお子さんを褒めることがありますか。」の回答が、「よくある」と「ときどきある」を入れると100%近いです。しかし、私は、20何年、30年近く子どもたちとかかわっていて、比べてはいけないのですが、最近の子どもたちを見ると、打たれ弱とか、すぐに何かで挫折してもいいような状況があります。これはどうしてだろうといろいろ考えてみましたが、小さいときに、何々ちゃんはずごいねえ、何とかちゃんはずごいねとか、天才だ

ねえとかって言うことがいいことか分かりませんが、そういった形で褒めて褒めて褒めて育てるから、子どもは、自分はそんなもんだというような意識を持って幼稚園、保育所、あるいは小学校に上がる。周りの子どもたちを見て、自分は何でもできる、何でもやれるんだみたいな意識でいたら、そうではないようなことで、あれっという感じが挫折感とかに結びつくような状況も出てきているのかなあと思いました。

以前、私は、少年野球の監督をやっていたのですが、昔の子どもたちは、あるポジションで競争を、自分が何とか勝つんだと一生懸命にやっていたのですが、最近の子どもたちは、一つのポジションでも、何とかちゃんがちょっと上手だから、自分はもうだめだみたいな形で、最初から頭の中で比べてしまって、やめてしまうとか、練習に出てこないとか、そういったことが案外見受けられるような傾向があるということです。ここら辺から褒め過ぎてもいけないだろうと思います。

○有馬委員 磯田委員さんと同じように、データをごらんになって感じられたことを次々おっしゃっていただいて結構かと思います。

○渡邊委員 今おっしゃった褒め言葉、これが逆のプレッシャーになる場合もあると思います。親が本当に褒めてくれるから、これ以上のことをしなくては、これより低下したらだめというようなプレッシャーもかかってくると思います。

それから、今、最近、運動会で1等、2等、3等とか、等をつけないで走るという傾向があります。競争心を出して等級をつけるということは、いけないのでしょうか。そういう指導をされているのかと思ったりもするのです。

それと、新聞に出ていましたが、食事をした後の感謝の気持ちをあらわすことについて、給食費を出しているから、そんなことをする必要はないと出ていました。一体どうなっているのだろうか、自分も不安になるようなことが社会で起こっています。いろいろな面で、これから先、日本はどうなるのか、感謝の気持ちを持って、何事にも接していくということができなくなるのではと、非常に不安に思っているところです。

それと、今、うつになる寸前の若い先生が結構いらっしゃいます。ちょうど私の娘も教職についておりますが、若い先生方がすごく悩んで悩んで、今にもというような感じだから、きょうは一緒に夕食を食べに連れて行って、いろんな話をしてみようということを話していました。子どもに対して、保護者に対して心に負担を持たれる先生もおられ、いろんな研修などもされていると思いますが、いろんな面で私も関心を持ちながら、他人ごとじゃなくて心苦しい点もたくさん持っております。

○有馬委員 委員さんから感想が出ておりますが、事務局で何か補足、関連してちょっとつけ加えたいことはありませんか。

○神門GL 先ほど担当から全国フォーラムを説明させていただきましたが、5ページの下のを見てくださいと、子どもの生活リズム向上のための調査研究の実施とあります。今回、島根県では後期調査で隠岐の島町と、雲南市が国から採択されています。そうしたことで、地域の子どもの地域で育てるといような、家庭の教育力、地域の教育力という調査研究結果がまとまるのではないかと思います。そうしたことが全国フォーラムの発表になると思っています。

もう一つは、仲野委員さんから、義務教育課から学力調査のところで提言をという話がありまし

たが、子ども社会教育、生涯学習の方では、なかなか学校現場へ立ち入れない状況もございます。ただ、社会教育の中で、地域の教育力の再生といった視点で意見をいただきながら、施策展開に結びつけば、子どもたちの生きる力に結びつくのではないかと思います。今、教育委員会では学力向上プロジェクト、そしてふるさと教育推進事業、もう一つは基本的な生活習慣の改善推進事業、この3点で知・徳・体の事業に取り組んでいます。社会教育委員の会で、家庭、地域の教育力の視点で提言なりいただければ、それが施策の展開に結びつくのではないかと考えています。

○有馬委員 それでは、次、お願いします。

○寺本委員 地域の教育力、家庭の教育力も含めた話ですが、本年度から出雲市が他県で開催されているコミュニティースクールを導入して、各学校で立ち上げるようになりました。それは、地域学校運営理事会という名前で、地域の方々、保護者、学校の3者で立ち上げて、学校現場の校長先生の立てる方針や、学校の運営や施策、基本方針や生活について、そのメンバーで承認をするというものです。それからあと、教員についても意見を言うことができるか、学校、保護者、地域がそれぞれの単体という立場ではなくて、一つの組織として学校に入って、子どもたちに対して支援をしていくものです。ある意味、学校の応援団という位置づけでこの組織は立ち上がるのです。多分そういう話が県でも出てきているのではと思うのですが、その辺については、県教育委員会として何か、考えはありませんか。

○有馬委員 事務局、一言お願いします。

○神門GL 国では昨年度から、コミュニティースクールの指定校という形でやっておりますが、島根県において、その事業に取り組んでいるところはありませんでした。今年度、出雲市がそういう形で独自に考えた取り組みになっているという現状です。

○寺本委員 今後、それについての話はないということですか。島根県はもう、そういう指定をしたりとかいうような方向は、今のところはないということですか。

○神門GL その辺が、子どもが答えられればいいのですが、主管課が違っており、返事はできないというのが現状です。

○古藤指導主事 義務の担当だと思いますが、詳しいことまで言うのは、今、手元に用意をしておりますので、申し訳ありませんが回答できません。

○寺本委員 このやり方が、ある意味いい方法であれば、本当に地域として何ができるかということのきっかけになるのではないのでしょうか。今、学校、地域、保護者の連携が大事だと言われている中、本当に地域の力というのがどういう形で必要とされているのか、それから保護者として、家庭教育力を上げたいというところについては、今のふるさと教育もそうですし、居場所もそうですが、必ず地域の皆様の力が必要だと思うのです。そのためには同じ土俵で、その3つが教育という部分で真剣に話し合える場というのを、いろいろな学校運営理事会という形で作れると思うのです。その地域によってそれぞれの特色や、場に応じた地域スタイルが当然あると思いますが、そういう土俵とか土壌を作る方策を検討していく必要がある気がします。

○有馬委員 今の寺本委員さんの意見、思いを受けて、仲野委員さん、ちょっと整理をして解説をしていただけませんか。

○仲野委員 学校評議員も学校運営協議会もありますが、確かにおっしゃるとおりの内容でいいと

思います。ただ、地域の学校としてこれからの学校を考えたときに、教員、保護者だけではなく、地域の方も、学校については責任があるのだということを認識しないと運営できないと思います。そうすると、地域の方も学校運営には参加していくということで、いろいろな意見が取り入れられた学校運営ができるのではないかと考えています。私たちも学校教育については、積極的に協力していく体制づくりを地域に求められてくるということになっていくと思います。3者が連携し合っていくということの本来の意味が含まれてくると思います。そのためには、形として表わせる学校運営協議会が必要ではないかと思いますが、教員の人事権もあると言われており、果たしてそこまで入っていくのかどうかということは、それなりの責任を持った地域の方、親の意見が出てこないといけないと思います。今のところは、開かれた学校づくりで地域の方がどんどん入って、新しい学校の方向性を一緒になって考えていく体制づくりが必要ではないかと考えています。出雲市がいいモデルになってくれたら、県内に広がっていくのではないかと考えています。

○有馬委員 それでは、お待たせしました。

○若菜委員 今回の保護者は、この家庭教育とか、教育力という言葉すら、ひょっとしたら100%の方が、「それ何？」と思う方もおられるのではないかと考えています。また、仕事柄、相談活動をしているのですが、100%近い方がお母さんの相談です。その中で感じるのは、学校の先生への不信感や、学校に対する疑問等、いろいろありますが、アンケートの中で、保護者の地域活動への参加がない感じがしました。子どもだけを地域へ地域へではなく、今現在子育てをしている保護者も、地域へ出て、いろいろな世代の方から教わるということは多々あるのではないかと考えています。そこで、小さいときから子どもを育てていくということや、自分たちの家庭の中で足りない部分を地域から教わるというようなこともできるのではないかと考えています。

学校に関しては、PTAという組織化をうまく活用しながら、学校へ子どもを預けっ放しではなくて、例えば保護者会や授業参観等で、100%近い方が担任の先生と会話ができるようなPTA活動を各学校単位で取り組むべきではないかと考えています。

また、自分もこういうふう育てられたからとか、ほうりっ放しだったからだというような子育てをしている保護者自身が、子育てをして、その子どもが悩んでいる現実もあります。その中で、不登校になったり、ニートになったり、いじめをしてみたり、また被害者になったりとかいうのも多々あるのではないかと考えています。

私の地域では、24時間営業の大きいスーパーができており、何度か私も夜、パトロールしたことがあるのですが、小さい子ども、また少し大きい子どもを連れて9時、10時過ぎに買い物に来ている方がいます。また、ゲームをしている方もいます。このような中で、生活リズムの向上ということは、保護者の認識を変えていかないといけないのではないかと考えています。また、子ども会というのがここに書いてありますが、今回、その子ども、今育てている保護者の会を中心に、地域の健全育成や、いろいろな方を交えて活動できるのが一番いいと私自身は考えています。

一番いいのは夏休みに、島根県内100%、ラジオ体操、どうなのかなと思います。これこそ一番身近な時間リズムではないかと思いました。

○仲野委員 全体を通してですが、このデータは、もし同じ調査をやっているのだとしたら、全国と比較すれば分かりますが、決して悪い数字ではないと思います。島根県は、まあまあまともな地域

の教育力なり家庭のしつけなりの意識はまだ持っていると思いました。だから、これをいかに下げないかということと、もう少し上げるにはどうしたらいいかという工夫をしていけばいいのではないかと考えています。いかにこれから中身をよくしていくかということで、根本的な作りかえではない数値として読みました。

また、例えば悩みがあった場合、7割近い方が配偶者に相談しますが、決してこれは悪くない話で、むしろいい話だと思います。それは家庭がちゃんとあるからです。その次に配偶者以外の家族、身内に、次に友人、職場と、その次にあるのが学校の教員で、教育者に対する相談がないということは問題であって、そういうところを見るべきではないかと思っています。家庭教育がどうこうではなくて、周りの問題が大きいのではないかという気がしました。だから、行政に相談がないから電話相談窓口の設置とかということではなくて、相談内容とか、相談に答えられる大人としての教育をどうするかということが、課題ではないかと思っています。

それから、早起きといろいろなクロスをやっていますが、リズムを作るためには何かのきっかけがないといけませんので、そのきっかけをどうするかということも、これから考えていただきたいと思っています。

私の大学の周り、半径500メートル以内に24時間コンビニが、五、六個あります。これでは、若者の生活習慣ができるわけないし、こういう社会的な状況の中でどうするかということは、課題として持っていかなければいけないだろうと思います。つまり家庭の中身ではなく、周りの社会的な環境を考えていきたいと思っています。前向きにとらえていいのではないかと感じました。

○有馬委員 幼稚園の園長でいらっしゃいます立脇委員さんにお尋ねしようと思います。このデータをごらんになって、かなりいい数字が出てるとおっしゃいますが、現実の親さんや子どもさんの状況をごらんになって、何か違った見方はありませんか。それでいいですか。

○立脇委員 やっぱり現場にいる者として、食事のこととか、子どもとよく話をするとか、褒める等々については、正直なところ、多少このアンケートに出ている数字に違和感を感じています。

今の家庭を見ますと、塾世代、塾にほとんどの子どもが行っていた方たちが親になっておられます。ですから、9時、10時という時間に起きているということに全く違和感がないのです。だから、子どもたちも10時台のテレビを見ており、誕生会のときに「大きくなったら何になりたいの」と聞くと、以前でしたらケーキ屋さんとかお花屋さんと言っていたのが、「野ブタをプロデュース」の人になりたいと言われて、「え、そんな時間って、ものすごく遅いでしょう。」という感じで、それを最後まで見ていたら何時になるのっていう感じです。

けれども、家庭の力も捨てたものじゃないなと思うことはしばしばあります。

9月10日に島根県幼稚園PTA連合会と振興会で、メッセにおいて子どもの食育、生活リズムについての講演会等を行うのですが、例年でしたらPTA会長さん、副会長さん、役員さんが出られますが、とてもいい講師の先生だったものですから、講演の案内を出したら、保護者の方、数人から行ってみたいという申し込みをいただきました。それから先日、あるイベントに参加したら、ちょっと後ろの方に子どもたちを座らせたなら、イベントをしていた方たちが、前の方に、その親子を誘われたのですが、その誘われた小さい子どもさんを連れた保護者の方は、私たちが前に行くと、幼稚園や保育所の子どもたちが見えませんかということをはっきり言ってお断りになりました。

子どもさんをひざの上に乗せて、横の方なり後ろの方で見ておられました。ああ、これは本当にすばらしいことだ、本当に子どもというものの目線で大事にさせていただいてるということを感じました。

また、今回、松江市駅周辺で水害があり、私も心配な家庭にいろいろ電話をして、「どうしておられますか、もし必要だったら幼稚園の方で協力できることは、、、」と話したら、床下浸水等された方が、もうお友達同士で、あそこへ今も行かせてもらっていますというつながりもあって、こういうのは、保護者同士が持っている力であり、また地域の力でもあるから、いつも悪いということを考えているわけではないのです。

○有馬委員 ありがとうございます。

○佐藤委員 先ほど話がありましたが、あまり褒めてばかりいると良くないのではないかということで、褒め殺しということもありますが、しかったりとか、けなしたりしながら育てるよりは、ある程度褒めて育てた方が、子どもは伸びるのではないかと思います。私たち大人に置きかえても同じで、いつもけなされて、上からしかられているよりは、たまには褒めてもらったら、頑張ろうかという気になるのではないですか。それと同じで、毎日褒めなさいというわけではないのですが、ある程度子どもは、うまくできたときとか、すごくいいことをしたときには大いに褒めてやる。そのかわり、いつも、いつもいつも褒めていると、自分はいつも優等生なんだと思うようになるから、そういうときにはすとんと落とすのです。喜怒哀楽ではないのですが、いいときはしっかり褒める。いけないときには注意して、それはいけないとしかることも大事だと思います。

それから、仲野委員さんからも、家庭教育をどうしたらいいかという話が出たのですが、やはり地域で子どもを育てていく上で、地域には私たちの年代ぐらいの先輩のお母さん方がいっぱいいるのですから、中央から仰々しく偉い先生を呼んでこなくても、子育てを実際にしたお母さん方に地区の公民館に来ていただいて、若いお母さん方に、こういうときにはこうするんよというお話し会のような形で若いお母さん方を育ててあげることが大事だと思います。これが一番お金もかかりませんし、とても実践的だと思っています。大学の先生を呼んでも、その先生が独身の先生だったり、実際に我が子を育てたことがない先生に、子育てはこうです、ああですと言われても、親さんは机上論で聞いていると思います。それよりも隣近所のお婆さんの、「ああ、そういえばあその子どもさん、こうだったんだね」とかいう実践の話が、かえってお母さん方にもよく分かってもらえるし、こんな質問したら笑われるんじゃないだろうかなという感じでしり込みをさせないためにも、先輩のお母さん方を使うべきだと私は思うのです。仲野先生、いかがですか。

○仲野委員 そのとおりだと思います。

○有馬委員 ありがとうございます。

○藤田委員 先ほどの福間委員さんの話に戻りたいと思いますが、今の子どもたち、親さんも、私は総じて力が弱いと思います。3世代同居の家族のお話がありましたが、私の近辺でも3世代同居の家庭ほど子どもの数が多い傾向にあるように思います。この資料の20ページに、勤務時間の短縮とか休暇の増加が少子化対策、あるいは子育て支援になると記述してありますが、確かに社会体制というのは大きなポイントであると思いますが、私は少子化については、子育ての負担感が先行していると思います。子育ての喜びというのが、どこかに行ってるのではないかと思います。まさに

3世代の世帯であれば、負担は非常に大きいと思いますが、それにまさる喜びというのがあるように思います。

それから、先ほどの、子どもの居場所ですが、かつては、子どもたちは自分で居場所を見つけたのです。ただ、社会環境が若干違ってきますから、社会力といいますか、力が弱まっているのが現状ではないかと思いました。

○有馬委員 ありがとうございます。

○木村委員 1点よろしいでしょうか。学校と地域と家庭の3者連携ということを言われました。結局、それぞれのところの教育力がないと、部分的にアップしたり、部分的にいい事例があったりしていますが、なかなか全体として底上げが弱いということが言えると思います。

先ほど寺本委員さんもおっしゃったのですが、出雲市の場合は、18年度から各小・中学校に地域学校運営理事会を作りなさいということが決まり、今、発足しつつあります。たまたま昨夜、うちの学校はその地域学校運営理事会を開きました。これは従来の後援会、PTA、青少協、親の会とか、いわば融合体です。その運営理事になった方は、全部守秘義務があります。委嘱状が教育長名で出ます。大体15名ですので、学校から、校長、教頭、教務主任が出ると、あと12名は地域の、いわゆる組織の代表の方に来ていただきます。従来のPTA、後援会、青少協、高体協、民生委員、主任児童委員の方との違いは、守秘義務があるということですので、結構学校の情報が安心して共有できます。当然、学力調査の結果も全て出します。学校がここを悩んでいて、ここで頑張っている。就職するにもできないから、何とか道を開いて欲しいとって企業の方をお願いする。今度の出雲市の場合の一番のメリットは、そういう学校の情報が安心して共有できる点です。ですから理事さんも安心して聞いてくださる。そうすると、情報が共有できるから、いわゆる協力態勢も本気でできる。協力しましょう、頑張りましょう。最後には、お互い心がけが大事ですね。健康で長生きしましょうということで終わってしまうから、最後までかみ合わないというか、かみ合っても部分的な人しかかみ合わないということでした。だから組織と組織、PTAとこういう点で学校がきちっとかみ合う、そのかみ合う前提は秘密も含めて情報を共有することです。そうすると協働するアクションが出てくるということです。

具体的にはボランティアですが、出雲市の南部の水害があった出雲市南部の方に募金活動をするということで、今、準備を進めています。それもその運営理事会がもとになって発想できたことです。本物の連携をするためには、情報を共有しないと共同アクションが絶対できないわけで、案外今までは情報の共有が弱かったから、伝統的というか、形式的というか、行事で終わってしまうことが多かったのではないかとということです。出雲市の場合、そういうぐあいに、結構学校の情報が行ったり来たりするので、非常に風通しがよくなったと思います。

○仲野委員 この調査の結果を報告いただいたのですが、この結果に基づいて、社会教育委員として何らかのコメントのようなものは出す必要はありませんか。どうでしょう。

○有馬委員 これはまだ内部で十分検討されたり分析されたりするのでは。

○仲野委員 アンケート結果もいただきましたが、家庭教育について、この会として何か意見を出すということは求められているわけではないのですか。

○有馬委員 この結果についての分析や考察やまとめをこの後、どの程度されますかということだ

と思うのですが、まず学力の方はどうですか。

○古藤指導主事 学力調査については、先般、速報という形で数値データのみ公開したところです。今後、8月末ぐらいまで、指導主事等による分析、それからベネッセコーポレーションとの情報交換の中での分析、10月初旬ぐらいまでに報告書という形で、第2次の情報提供を予定しています。その中では、全国的な結果も出ますので、もう少し詳しい情報提供もできると考えています。

○有馬委員 家庭の方はどうですか。

○橋G員 報告書の25ページを見ていただきますと、今回の結果の分析とまではいきませんが、課題が浮き上がっており、それに向けての大まかな方策を載せております。ただ、この方策を具体的にどのようにしていくかについては、このアンケート調査を企画立案し、実施した島根県地域家庭教育推進協議会で、十分練っていただく格好になると思っています。ただ、今回の結果の概要については、「教育しまね」7月号において全県の小・中学校の保護者に配って、一部を紹介したところです。今後、秋口に向けても、今回の調査結果の概要をパンフレットのような形でまとめて県民の皆さんに情報提供をしていきたいと考えています。

○有馬委員 それでは、それぞれの調査結果についても、まとめていただき、今後、末永く利用できる形で整理をお願いしたいと思います。

なお、来年の2月24日には「子どもの生活リズム向上全国フォーラム」もあるようです。この大会が、実りあるものとなって、広く有効な形で浸透しますようにお願いします。

随分延長しましたことをお断りして、協議事項を終了します。